

KOKU TISIKI

# 航空知識

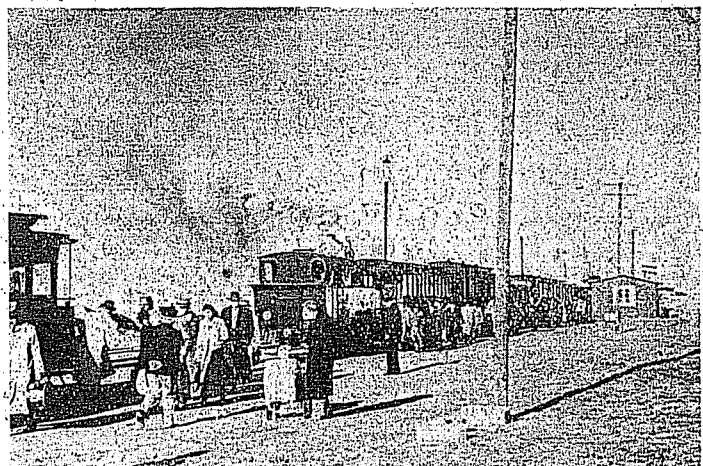


# 滞 歐 雜 記 帳 (その十)

工 學 士 山 本 峰 雄<sup>(1)</sup>

## 8. 漢堡造船研究所後援協會大會 (2)

二つの輕便列車は萬國旗で飾られたヘルヌムの村を出発して、ジルト島の砂原を北に向つた。華かな服裝の婦人を混べた國際的雰圍氣の溢れる一行を乗せた列車とは、受取れない位に古びた客車である。窓外を眺めると外國には珍しい葉葺きの農家が、砂丘や砂原の上に點々として灰色の影を點綴して居る。北に上ると共に人家も見られなくなつて、不規則な形の白い砂山が窓邊近く迫つて來た。砂山の稜線には弱々しい夏草が北海の風を受けて揺れて居る。鹿島の砂丘を思出して懐しい氣持に耽り、濱防風の赤い莖等を想像して居ると、汽車の轍の音に交つて紛ふ事も無い飛行機の爆音が聞えて來る。碧い空を見上げれば遙かに戦闘機の一群が隼の様に我々を目指して飛んで來る。忽ちの中に鋭い爆音が上空を通過して行つた。メツサーシュミット 109 型戦闘機である。續いて双發爆撃機が前方から近づいて來る。機首の硝子張りの機關銃座の廣いことからハインケル



第 1 圖 ヘルヌムの輕便列車に乗る (著者)

の硝子張りの機關銃座の廣いことからハインケル

111 型の改造機である事が判る。英國の制海權を破るべく此の北海の孤島に、相當の空軍が配屬されて居る事は飛んで居る機數でも明かである。ヘルヌムを出発してから 1 時間の後午後 7 時終點ウエスターランドの小驛に着く。

汽車が停つてプラットフォームに下りると突然

嚙喰たる音樂が、驛の前から湧上つたのは参加者一同を驚かせた。驛前の廣場に出ると空軍の軍樂隊が獨逸のマーチを奏し獨逸少年團とヒットラー青年團が整列し、寫眞班が物珍しげな

見物に交つて活動する。大變な賑かさである。驛の入口には中央に獨逸國旗、左右に日章旗とイタリーの國旗が翻つて居る。立停つてなつかしい大日章旗を見上げて祖國の國威に感謝の念をさゝげて居ると、獨逸少年團の一人が近づいて來てホテル迄案内するからとトランクを奪つて先導する。道路の兩側には各國の旗が立並んで全くお祭り氣分である。

少年團員に教へられて割當てられた宿舎であるハウス・ウエンシュマンに入る。避暑地らしい瀟洒な白塗四階建の此のホテルは、主人を始め女中

(1) 航空研究所

迄我々を歓迎して總出で部屋迄案内して呉れる。

旅装を解いて友人同志誘合せて此の獨逸第一の高級避暑地と稱されるウエスターランドの風物を見るべく海岸に出る。砂丘と白砂を想像して居たのは大違ひで、幅 20 米許りのアスファルトの遊歩道が見晴しのよい丘の上を通ひ、之から 5 米許り下りて海水浴客用の汀が白く廣がつて居るのである。白砂の上には見渡す限り灰色にさせた籐製の休憩籠が置かれ、之等は北海の夕陽を受けて長い蔭を砂の上に曳いて居る。凡そ殺風景な景色である。夕方冷たい海に入つて居る者は殆んどない。我々は深い砂の上を休憩籠の間を抜けて散歩し波打際を波に追はれて走り、久し振りに海の香を嗅ぎ、波のしぶきを浴びた。

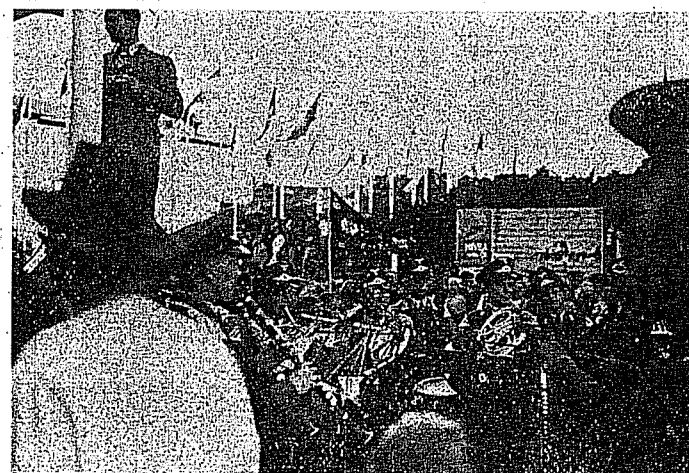
再びプロムナードに戻つて豫ねて定められた豪華な海濱ホテルの食堂に集つた。ホテルの前の音樂堂には先程の空軍音樂隊がやつて來て再び奏樂を始める。トラックが各國の旗を持つて來て、プロムナードに立並んだ旗竿に再び華かな萬國旗が翻つた。中央音樂堂に最も近く北海の風をはらんで翩翩とひるがへつて居るのは我が日章旗である。漢堡の大學の講堂で見られなかつた日章旗は、此處では堂々と中央に華かな然かも嚴肅な姿を見せたのだ。先日來の不滿が



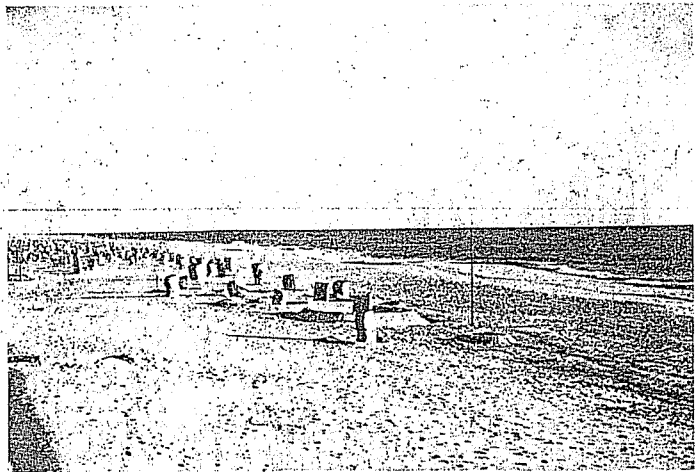
第 2 圖 ジルト島の農家



第 3 圖 砂 丘



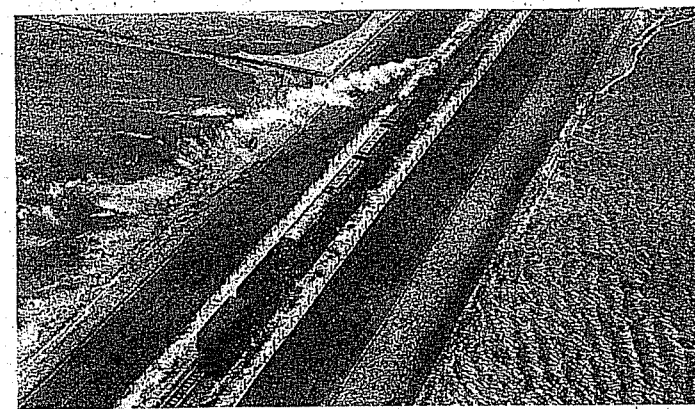
第 4 圖 空軍音樂隊の奏樂 (著者)



第5圖 ウェスターランドの海岸 (著者)



第6圖 プロムナードに翻る日章旗 (記者)



第7圖 ヒンデンブルグダム

一時に晴れる思ひがしたのも無理はない。

食後は隣りの「クーアハウス」でハンブルグ・アメリカ汽船会社のプライケン氏の「電氣船ヘルゴランドの推進装置」に関する講演があつて、フォイト・シュナイダー・プロペラの効用が幻燈で説明された。講演が終つてプロムナードに出ると、日暮れの遅い此の北地の海岸にも夕闇が迫つて波頭も灰色に煙つてゐる。残照が水平線を赤く染め、夕食後の散歩に出た避暑客が黒くプロムナードを埋めて居る。異國の夕暮れに浸つて柵に倚つて話をして居ると、10歳位の子供が我々を物珍しげに圍んで人なつこい眼で眺めて居る。其の人に水平線を指して「此の海に向ふは何處だらう」と聞くと微かな聲で「英國」と答へて沈黙した。宿命の歐洲制覇の争ひと更にベルサイユ條約の苦しかつた極措が、此のいたいけなブロンズの少女の心の底に暗い影を落したのであらうかと、話題を轉じると忽ち朗かな少女に歸つて日本の話をせがむのであつた。

ホテルに歸つて静かな夜を友人と語り更かして居ると、時々華かなざわめきが避暑地の夜氣を縫つて響いて来る。

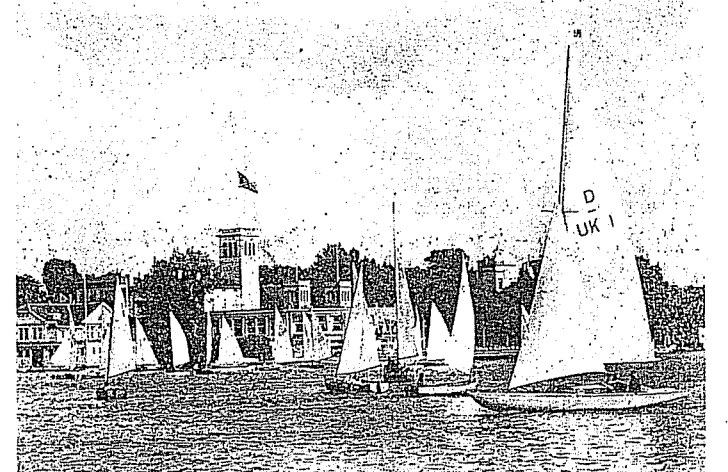
海濱の健康な空氣は旅の疲れを充分に癒して呉れた。翌朝7時には花で飾られた食堂で簡単な朝食

をすませて、7時半ウェスターランド發の汽車で一夜を送つた思ひ出の避暑地を後に、再びもとの道をヘルヌムに向つた。

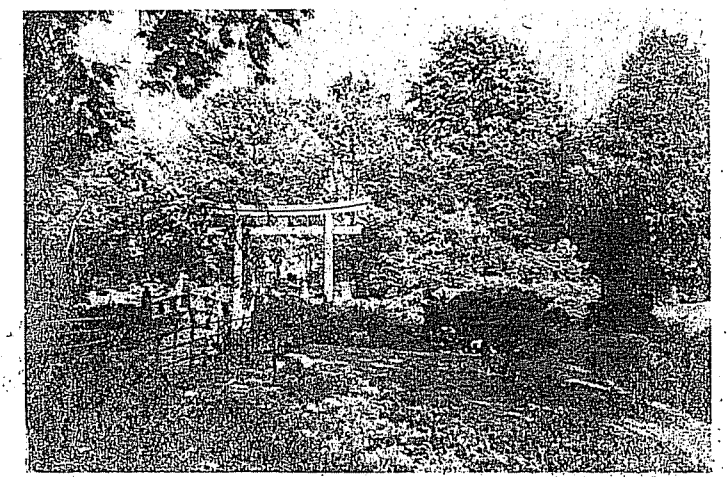
ウェスターランドからは東方獨逸本土クランクスビュル迄鐵道が敷設されて居るのであるが、此處には有名な海中に一條の鐵道を通したヒンデンブルグ・ダムがあつて此の孤島と唯一の聯絡路を形成して居る。今度の戦争が始まると共にウェスターランドとヘルヌム及びヒンデンブルグ・ダムが、英空軍の最初の爆撃目標となつた事は歸國の途中にラジオで聞いたのである。英國は其の効果を大いに宣傳したのに對し、獨逸は各國の新聞記者を招待して其の爆撃の跡を見せて何等の効果もなかつた事を證明して居る。對岸の國を問はれて「英國」と答へて沈黙した少女が、爆撃の事を思つたのではないかと後で考合せたのであつた。

汽車がヘルヌムに近づく頃にはハインケル111型が砂丘をかすめて30米の低空飛行で、我々の汽車を歡送して呉れた。胴體の中に入つた操縦者の顔が汽車の窓から見え、機首の銃座からは手を振つて挨拶を送つて居る。

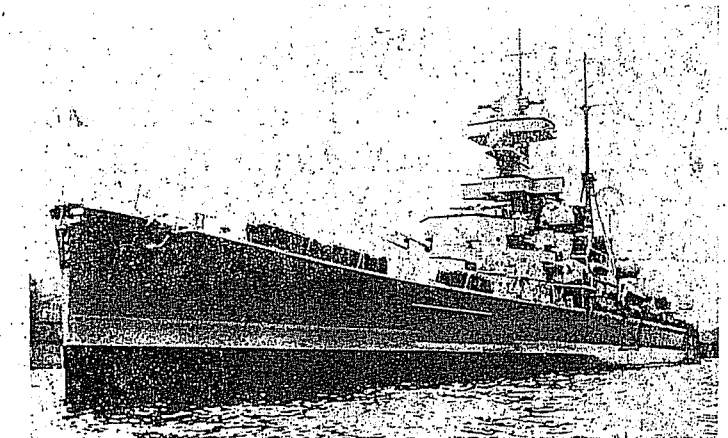
ヘルヌムから10時間半の船旅も再び好天に恵まれて和かであつた。船中では船の動揺防止の新裝置の講演と見學があつて單調な旅情が慰められた。ハバークの埠頭



第8圖 ウーレンキルスターフェアハウス



第9圖 ハーゲンバック動物園の日本庭園 (記者)



第10圖 重巡アドミラル・ヒツパー

から再びストライト・ホテルに入つた頃には、街に灯が入つて都會の光と騒音が氣になつたのである。

16日の朝は8時に集合してバスで漢堡造船試験所の創立25周年記念式に参加する。古びた造船所の玄関も今日はハーケンクロイツの旗に囲まれて賑かな粧を凝らして居る。有名な大水槽の横の模型工作室の中に演壇が設けられて、各國の代表者が祝辭を述べ、次いでケム博士の挨拶がある。極めて學者的な質素なお祝ひであるのも床しい。式後大水槽、旋回性能試験池、キャピティション試験用回流水槽、模型工作室、DVLに屬する高速水槽を見學し、試験のデモンストレーションがある。質疑應答や討論を重ねて仲々の盛會である。午前中の2時間は有益な見學を行ひ再び試験所を後に後援會及試験所の招待午餐會の行はれる漢堡市公會堂に向ふ。大ホールで宴會を終つて花で埋つた廣い庭を散歩して歡を盡した後に散會する。

午後は自由行動となつて大部分の人がハーゲンベックの動物園に向つた。我々も此の有名な自然の動物園に入つて一巡した。園内には日本庭園が設けてあつて、鳥居や朱塗の橋、日本家屋、日本の樹木の中を散策し、祖國に歸つた思ひをした事であつた。夜は後援會及試験所主催で漢堡造船所の25周年記念晩餐會がウーレンホルスター・フェアハウスで行はれた。外アルスター湖に臨んだ美しい白聖のフェアハウスは、ヨットクラブを持つた豪華な社交場である。各國の代表が夜會服で集合して儀禮的の挨拶が交換され、我々も獨逸の主催者側と一通りの挨拶を交はした。食事も今晚は佛蘭西の代表に文句を云はれない爲か北海鱈には1937年の獨逸葡萄酒を、鹿の肉には1933年のポルドーと云ふ風な注意が加へられて居る。

食後は苦手のダンスが始まつた。我々は漢堡の總領事と共に林の中のテラスに出て故國の話に夜

の更けるのを忘れた。

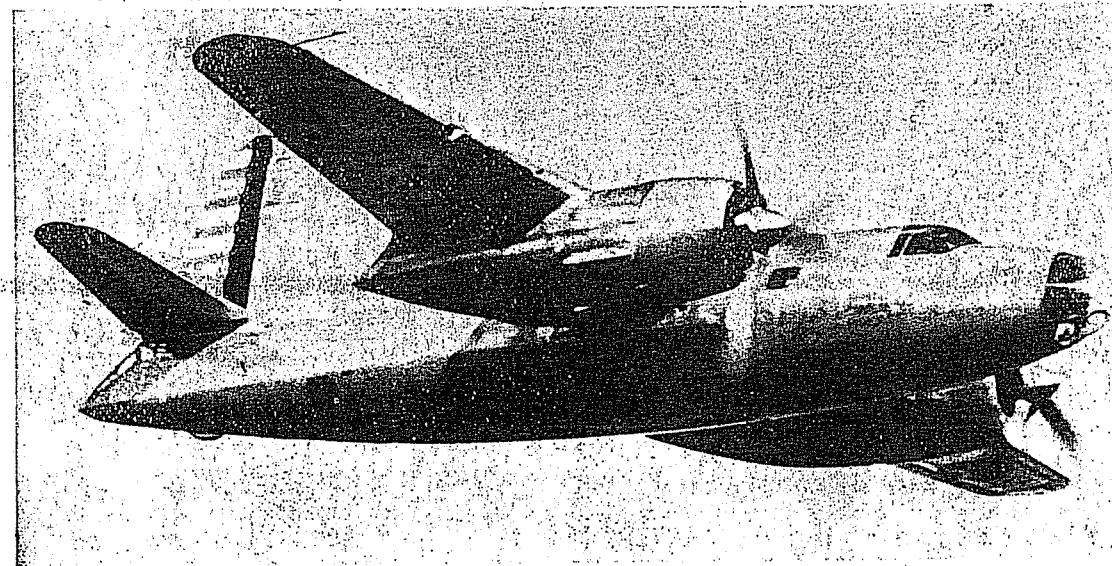
翌日は愈々待望して居た「海軍の日」であつた。早朝5臺のバスで3日を過したハンザの主都漢堡を後にキール軍港に向つた。途中豫め設けられた休憩所で一度停車して参加者の點呼を終り10時半キール鎮守府に着いた。直ちに鎮守府の大ホールに全員集合して今日の主人役、獨逸海軍司令官レーダー提督の挨拶を俟つた。正面のドアを排して現れたレーダー提督は全員起立して獨逸流に右手を擧げる敬禮を受けて着席した。と同時に突然右手高く設けられた樂手席から爽かに莊重な絃樂が流れて來た。白服を着けた四名の水兵がかきならず音樂は、ホール一杯に溢れて嚴肅な雰圍氣を醸出したのである。10分の演奏が済むとレーダー提督はやがて立上つて演壇に立つて挨拶を述べた。先づ参加者一同に形の如き歡迎の辭を述べ次に獨逸海軍が外國人を新しい軍艦に招待するのは實に劃期的な事實である事を指摘し、後に「今日の参加者一同はナチス海軍の新鋭艦を觀察する事に依り、如何に獨逸が歐洲の平和に貢獻せんとして居るかを承知せられるであらう」と結んだのである。英佛の造船専門家や海軍々人とバルカン始め幾多の歐洲の小國の代表者は、レーダー提督の最後の一言を夫々異つた思ひを以て聞いたであらう事は云ふ迄も無い。歐洲の時局は愈々怪しくなつて誰の胸にも近い將來戰爭の勃發する事は必至であると思ひ乍ら、學會の會合には其の感情を表はす事を避けて居た心遣りが一度に止めを刺された様な思ひがしたのは、獨逸語の判る英佛の参加者である。しはばき一つ聞えない静けさがホールに溢つた。再び奏樂の音にせめて和かな感情を取戻した面持の彼等を私は見てとつたのである。音樂が終り、レーダー提督が退去した後海軍士官の案内で棧橋に向つた。棧橋には沙風に焼けた士官が立つて我々を軍艦に運ぶ汽艇の世話をして居る。ハー

ケンクロイツの旗が各棧橋に翻り右手には輕巡エムデン、一萬噸巡洋艦アドミラル・ヒツパー、空軍の水上機救難艦グライス正面には戰艦シャルンホルスト、右手には機銃、小口径砲、高角砲を備へたヒツラーのヨットが浮んで居る。對岸には獨逸造船所の大ドックを始め多數のドックが岸を覆つて居る。キールの港も先頃迄は港内遊覽船が出て寫眞を撮る事を許されて居たが、今では軍港内は勿論市中でも寫眞の撮影を禁止されて居る。

私の乗る艦は約一ヶ月前に就航した獨逸の最新一等巡洋艦アドミラル・ヒツパーである。やがて艦載汽艇に乗込んでヒツパーに向ふべく棧橋を離れる。汽艇がヒツパーに近づくと共に我々はヒツパーが鉄の無い船である事を發見して一驚したのである。水線下の装甲板と艦體との取付部が皿鉄である外は艦體全部が熔接で組立てられ、舷梯の一部にはハイドロナリウムの部分が白く光つて居る。案内されて士官室に入ると、此處は内張りから、照明器具、家具類全てハイドロナリウムである。今さらに獨逸の徹底振りに一驚を喫した次第である。士官室では水兵のサーヴァイスで賑かなア

ットホームがあつて、獨逸海軍の將官の挨拶がある。中には日獨文化交歡に縁りの深い人々の顔も見える。

會食後艦内の見學を行ふ。砲塔の中には入れないが至る所熔接で一本のリベットをも發見する事が出來ない。獨逸が多年の間各材料研究所を動員し、強度試験振動試験は勿論爆薬の水中炸裂に依る衝撃に對する強度の試験迄行つて熔接構造を徐々に各部に採用して經驗を積み之が遂に全艦熔接迄に進展したのである。特殊鋼ST52が此の熔接構造の發達を促したのは云ふ迄も無い。國營自動車道路の橋梁に、各種の建築物に同じ特殊鋼が採用されて重量の輕減が達成され、其の經驗は更に飛行機の取付金具の熔接構造に迄進展して居るのである。然かも長年此の熔接構造の發展に關與した某社の一技師は私の質問に答へて獨逸は將來と雖も全ての軍艦を全熔接で作るのでであると語つて居る。軍艦の熔接構造が實に正確な寸法の調整を必要とする事は嘗つて獨逸の一雑誌に發表されて居る。我々は獨逸の優秀な技術の一例を此處に隔無く見る事を得たのである。



マーチンB26型爆撃機(3頁参照)

航空研究所 岡本哲史 著  
工學士

# 著名翼型集

## 第 1 輯

- |                   |                    |                   |
|-------------------|--------------------|-------------------|
| 1. N.A.C.A. 0009  | 12. N.A.C.A. 2412  | 23. R.A.F. 48     |
| 2. N.A.C.A. 0012  | 13. N.A.C.A. 2415  | 24. U.S.A. 35 A.  |
| 3. N.A.C.A. 0015  | 14. N.A.C.A. 23012 | 25. U.S.A. 35 B.  |
| 4. N.A.C.A. 4309  | 15. N.A.C.A.—M. 6  | 26. Göttingen 387 |
| 5. N.A.C.A. 4312  | 16. N.A.C.A.—M.12  | 27. Göttingen 532 |
| 6. N.A.C.A. 6309  | 17. Clark Y        | 28. Göttingen 535 |
| 7. N.A.C.A. 4512  | 18. Clark Y. H.    | 29. Göttingen 623 |
| 8. N.A.C.A. 6512  | 19. R.A.F. 15      | 30. Göttingen 645 |
| 9. N.A.C.A. 4412  | 20. R.A.F. 28      | 31. Göttingen 647 |
| 10. N.A.C.A. 4415 | 21. R.A.F. 34      |                   |
| 11. N.A.C.A. 6409 | 22. R.A.F. 38      |                   |

定價50錢 送料3錢

## 第 2 輯

- |                   |                   |                    |
|-------------------|-------------------|--------------------|
| 32. N.A.C.A. 0006 | 43. N.A.C.A. 4406 | 54. N.A.C.A. 6315  |
| 33. N.A.C.A. 0018 | 44. N.A.C.A. 4409 | 55. N.A.C.A. 6318  |
| 34. N.A.C.A. 0021 | 45. N.A.C.A. 4418 | 56. N.A.C.A. 6321  |
| 35. N.A.C.A. 2406 | 46. N.A.C.A. 4421 | 57. N.A.C.A. 23006 |
| 36. N.A.C.A. 2409 | 47. N.A.C.A. 4506 | 58. N.A.C.A. 23009 |
| 37. N.A.C.A. 2418 | 48. N.A.C.A. 4509 | 59. N.A.C.A. 23012 |
| 38. N.A.C.A. 2421 | 49. N.A.C.A. 4515 | 60. N.A.C.A. 23015 |
| 39. N.A.C.A. 4306 | 50. N.A.C.A. 4518 | 61. N.A.C.A. 23018 |
| 40. N.A.C.A. 4315 | 51. N.A.C.A. 4521 | 62. N.A.C.A. 23021 |
| 41. N.A.C.A. 4318 | 52. N.A.C.A. 6306 |                    |
| 42. N.A.C.A. 4321 | 53. N.A.C.A. 6312 |                    |

定價50錢 送料3錢

東京市麴町區  
內幸町二ノ二

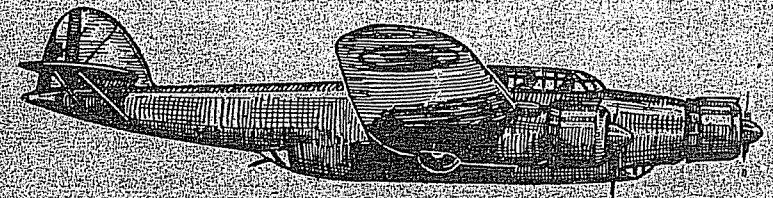
航空知識社

電話銀座 5353  
振替東京 64444

Ⓣ 定價 60 錢

KÔKÛTISIKI

# 航空知識



# 4

第七卷

第四號

航空知識社

航空知識 第七卷第四號 昭和十六年三月廿七日印刷發行 昭和十年十二月二十二日第三刷印

# 滞 歐 雜 記 帳 (その十二)

工 學 士 山 本 峰 雄<sup>(1)</sup>

## 9. ヒットラー青年團との一日

獨逸の將來を背負ふ有能なる青年を教育する國家的組織としてのヒットラー青年團は世界的に餘りにも有名である。

「現代は炬火に憧憬する大學生のロマンスを要求しない。僅か 17 歳位の年若い青年が人生の意義に關し、理論づくめの、而して何等實踐の伴は

ない討論を行つたからとて如何にして興味や理解が持てようか。ワグナー・フォーゲルの各種の聯盟の指導者等の多くは専ら理髮店に赴かないのを原則とした。……彼等は今日最早存在し得ない一



第 1 圖 フクの風光

つの時代に生きて來たのである。彼等は技術や労働青年に對して何等の立脚點をも持つて居ない。多くはブルジョアの遊戯である。旅行と遍歴が彼等の表徴であるとするれば、職業訓練こそはヒットラーユーゲントの表徴である」と云ふのは今次の大戦にヒットラー青年團の指導者の職を抛つて祖國の難に赴いたシーラツハの言である。斯くしてナチス政權の持つ新しい世界觀の下に國家の爲に自己を完成する青年の修養團體たるヒットラー青年團が舊時代のワグナー・フォーゲルに代り、第

(1) 航空研究所

三國家の成長の爲に闘ふ事となつたのである。

シーラツハの言に在る如くヒットラー青年團は正に職業訓練に依り國家の爲に自己を完成するのである。其處に一般訓練と共に將來獨逸國家に有益なる奉仕を行ふ爲に航空スポーツ班(Luftsport-scharen der Hitler-Jugend 或は Flieger-Hitler-Jugend)が生れ、海上スポーツ班(Marine-Hitler-Ju-

gend)が生じ、通信班(Nachrichten-Hitler-Jugend)、自動車スポーツ班(Moter Hitler-Jugend) 建築家及技術教育班(Hitler-Jugend-Ausbildungswerk für Architektur und Technik)が生れても不思議はないのである。そして至ては軍隊の豫備教育を主題として職業教育を兼ねて居る。

「獨逸の青年には他國の青年の國防教育に於けるが如く武器を持たせるべきでもなく、又武器を持たせないであらう。然し乍ら彼等には他の三大目標が與へられる。男子の最高道德の獲得、最良なる身體機能の獲得、山野の完全なる支配である」とはヒットラー青年團の上級指導者の言である。先づ自然人としての完成が人生の最初の教育とされて居るヒットラー青年團が山野の征服を重く見る

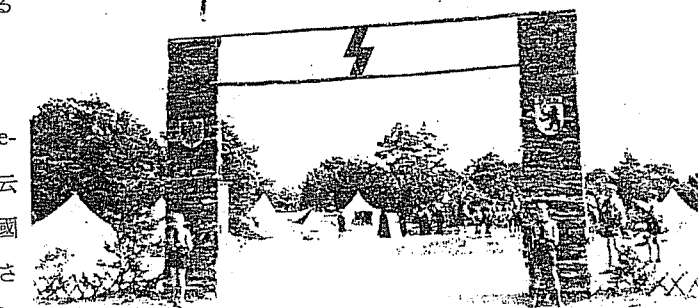
のは當然である。

斯くて獨逸の山野に静寂な夏を迎へるとヒットラー青年團は各地に幕營の訓練を受ける。幕營こそは現代の青少年生活に於ける最大の教化力であるといふ信條の下に風光明媚の地方を選んで祖國の山野の上に旅行と行進、測圖方位判定、感覺の練磨、地形判斷、目標判斷、地形の利用、偽裝、敵前運動、偵察警戒等の多様の訓練が行はれ、更に獨逸特有の野外競技、體育、空氣銃射撃等の軍隊豫備教育が實施され、之等を通じて、勇氣の涵養、不撓不屈、協同一致、の精神が培はれる。我國古來の尙武の風、上長尊敬の氣、祖國愛を多分に其の教育の中に折込んで居る事は云ふ迄もない。

伯林に大學教授聯盟外國課(Das Auslandsamt der Dozentschaft Universität und Hochschulen Berlin)と云ふのがある。伯林に入つた多數の外國留學生や大學教授は、此の團體で催される各種の講演や見學に必ず招待される。どこで聞いたのか判らないが私の所へも時々招待狀が來る様になつた。専門の見學に忙しいので餘り顔を出さなかつたが、7月になるとヒットラー青年團の夏期幕營に案内されたのである。かねてヒットラー青年團の教育効果を日常見聞してその青年運動が從來の獨逸人と丸で別物の眞摯な青年を作りつゝある事を知つて居た私は、之だけは是非見ておこうと見學團に加はつた。早朝ロバート・コツホ廣場にある聯盟の前に集る。参加者が集合を終る



第 2 圖 獨逸少年團訓練隊(著者)



第 3 圖 幕營の門(著者)



第 4 圖 幕營(著者)

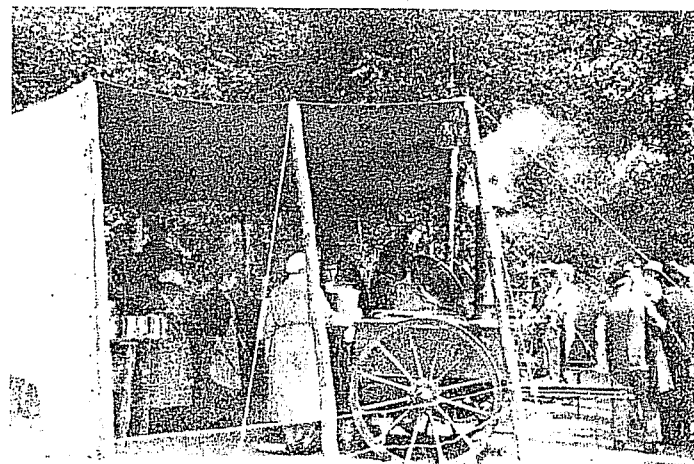
前に廣場の  
附近を散歩  
すると此の  
附近は各種  
の學會の中  
心らしく地  
學協會や醫  
學關係の團  
體の建物が  
あり、廣場  
には細菌學  
のコツホや  
アミノ酸の  
エミール・



第7圖 國旗と班旗の飾り(著者)

フィツシャの銅像等が木立の蔭にたつて居る。一天の雲もなく晴れた清々しい朝の光の中に見る之等の碩學の像を仰いで居る氣持は格別である。ナチス獨逸に受繼いで居る之等の獨逸の碩學の精神の上に、ヒットラー青年團の日本の精神教育が加はつたらば、獨逸は恐ろしい國となるであらうと今日之から見るヒットラー青年團の幕營訓練に一層興味を持たれたのであつた。

集まるものは日、伊、佛、英等の留學者の外にバ



第6圖 炊事場(著者)

ルカンの小國を總べて網羅し總勢100人を超えて居る。聯盟の世話掛A女史に紹介された後、4臺の流線形大型バスで幕營地に向ふ。獨逸が外國人に對して如何に大掛りな宣傳機關を持つて居るかは此のやり方だけでも充分納得が行くのである。

4臺のバスは緑の平原を南西に下り國營自動車道路の伯林南環狀線を通つてストルコウの附近に達し、此處でヒットラー青年團と獨逸少年團の代表に迎へられた。路傍にバスを置いて獨逸の片田舎にありふれた飲食店に入り此處で思ひ思ひに休憩を取る。田舎路におき捨てられた様な飲食店に一時に100人以上の人が押かけたので主人と女中は顔を赤くして外國の珍客のサーヴァイスに大重になつて居る。店の向側の杉林の中で出迎へのヒットラー青年團と記念撮影をして居る内に出發の合圖である。我々のバスは再び埃をあげて森の中の砂道を走つた。鏡の様な湖水が夏の陽に輝いて居るのが車窓から眺められる。獨逸少年團第200團(Jungbann 200)フランデンプルグ班の夏期幕營地はストルコウの町外れ、ブクの湖畔の松林の中に設けられて居た。幕營地の入口でバスを乗捨てて白砂の上を幕營地の門に向ふ。門前には少年團の喇叭鼓隊が整列し、我々の先頭が門に近づくと

同時に勇壯な歡迎の曲を奏して呉れた。長い胴に模様を描いた大鼓、黒地にハーケンクロイツの印を染めた旗をつけた喇叭、何れもヒットラー青年團獨特の樂器であり、狩獵の民族獨逸の表徴でもある。門は森から伐つた木を組立て、柱に伯林市とフランデンプルグのマークが飾られ、2人の少年が兩手を後ろに組んで番兵に立つて居る。

松林の中、白砂の上に白く幕營のテントが1群宛點々と張られて居る。

一同幕營長から夏期幕營の目的や現状の説明を聞いてから數班に分れてテントを見て廻る。テントは獨逸少年團の最小單位である凡そ10人の團員より成るユンゲンシャフト(Jungenschaft)を一組とし之に指導者がついて居り、更に之等が4個集つたユンクツーク(Jungzug)には更に年長の指導者がついて居る。ユンクツークの指導者は各1個のテントを持つて居るが團員は數人宛一つのテントに入つて起居を共にし朋友精神を涵養するのである。各天幕の周圍は團員の手で清掃され砂で堤や庭園を作り野草を植え入口には木を彫刻した各種の飾りが立て、ある。テントの中には寢具所持品等が實に丁寧に一定の規則を以て整頓されて居る。10數年も前に山中湖畔で見學した日本少年團指導者訓練幕營を思出す。指導者の1人に頼んで彼の天幕を見せて貰ふと此處には電話が架設されて居る。總ての指導者が自分で架設した電話を持つて居るのであると聞かされて、流石に科學の國の少年團であると感心する。全體として10歳乃至14歳の子供としては實に規律のよい事を感じさせる。「國家社會主義の成果は規律の成果であると共に國家社會主義の青年も同様に規律と從順との基礎の上に立たなければならない」と云ふ標語を其の儘此處に實行して居る事を感じるのである。

テントを一通り見終つて設營の本部に行くと此處には野外の天幕病院があり、郵便局があり、ラヂオ受信所があ



第7圖 食事(著者)



第8圖 食事のコーラス(著者)



第9圖 營内の少年(著者)